



発展したアジアの不思議

ケオラ・スックニラン

先日、休みを利用し二歳の娘と家族三人で韓国へ行く機会があった。数日間の滞在で、娘をベ

ビー・カーに乗せ、地下鉄などで街中を観光した。去年、初めて娘と韓国に行ったときと同様、今回もまた驚かされたことは、子供、とりわけ娘への周りの人の行動であった。例えば、すれ違う人が、娘に話しかけたり、触ったりもした。地下鉄の階段では、娘が泣いていると、階段を上ってきた見知らぬおばさんがカバンからお菓子を取り出して、「これを食べさせて」と言わんばかりの韓国語で話しかけながら、私たちに渡そうとした。また、新鮮市場では、子供を見失ったと思つて妻が慌てて周りを見渡したところ、娘はいつの間にか店のおばさんに次々と抱っこされていたのだつた。これらのできごとには、

親ばかりの私も妻も微笑ましく感じ、そして、韓国人に少し温かさを感じた。

もちろん、日本でも電車

などで、しばしば娘にはほ笑んだり、席を譲ったりする親切な人がたくさんいる。しかし、実際に話しかけたり、ましてや直接触れたりする人は、滅多にいない。ただ十何年も日本に滞在すれば、興味があつても怪我をさせるのではないかなど遠慮しているだけでも推察できる。最近まで訪れる機会はなかったが、戦後経済が急速に発展した韓国は、東南アジアから見ると何かと日本と共通点の多い国との印象が強い。そのためか、あまりにも違うこの子供への接し方は、印象深かつた。そこで、いつもの悪い癖でかなり強引で、またあまり直接的に関係のない仮説を自分の中で立て、後で調べてみることにした。それは、日本に比べ子供への関心が比較的に高い韓国では、出生率がまだ高いはずだということであつた。

研究対象にこそしたことはないものの、経済発展が進むにつれ、出生率が減少するという話はしばしば聞く。ところが、実際に調べてみると、驚いたことにOECDの統計では二〇〇八年の韓国の出生率が一・一九%で、日本の一・三七%よりも更に低い。一九七〇年までは、韓国の一五歳から四五歳の女性の出生率が約四%で、日本の約二倍あつたが、二〇〇一年に逆転した。しかし、もっとも驚いたのは、アジアの経済発展を牽引しているのであろう経済大国の日本と韓国の出生率の低さが、二〇〇八年の統計でOECD加盟国中、第四と第一位という事実だ。興味本位で出生率に関する研究をネットで読み進むと、先進国での出生率の低下について、次に挙げるいくつかの共通認識をも発見した。たとえば、急激または継続に低下する出生率が将来、社会・経済的な問題を引き起こすことや、出生率低下が進行している理由として、晩婚化、高い教育費など子育てによる直接・

間接的な経済負担を回避する傾向を挙げていることである。中には、子どもの死亡率が高く、労働力が多く必要な時代では子どもを多く出産するが、経済発展により死亡率が低下し、かつ個人の経済的な自立が増した時代になると出産率も低下したと、まるで個人が出生を経済活動の一環と捉えているような傾向まで示されている。

一九歳まで世界最貧国のひとつラオスで、常にだれかの子供がいる環境で育ち、それをあたりまえと感じてきた自分にとっては、まさに大きな力チャー・シヨックであつた。哲学の領域ともいえる人間の出生の目的については、自分の見識では到底論じることができない。しかし、上で述べた自分の経験から、たとえ自分の子供以外でも、子供と接することに幸せを感じる人がいることが分かる。もちろん、欲しくない人はその自由が認められるべきだが、そうでない人の場合、経済発展により子供を持つ喜びが抑制するようなことがあれば、それはその発展にはまだ何か間違つているところがあると私は信じる。最近、発展に「幸せ」を取り入れようとする動きがあるように、今後発展しようとしている多くのアジア諸国が「お手本」にしているはずの日本や韓国でも、人間本来の幸せと相反しない経済発展を目指す転換の時期になつてきたのではないかと感じている。



写真上：一家で（右が筆者）
写真下：父（中央）の誕生日を祝つて

KEOLA Souknilanh / アジア経済研究所開発戦略研究グループ

専門 国際分業、国有企業、計量経済学、ラオス経済
近著に「ラオス・タイ越境インフラ整備と経済活動 一第1・第2メコン友好橋を中心の一」（アジ研選書石田正美編『メコン地域 国境経済を見る』）。